

課題曲に対するイメージの創造——1.

「ブルグミュラー 二十五番練習曲」

佐 武 進

1. はじめに

平成元年8月2日、山口県音楽教育連盟主催の第37回山口県学生音楽コンクール予選が行われ、著者は小学校2年の部の審査員を委嘱され出席した。

課題曲がブルグミュラー二十五番練習曲より「貴婦人の乗馬」という、ポピュラーな曲であったせいか、参加者は昨年度に比べ約60人も多いとのことで大変喜ばしく思った。夏休みの前半を返上して猛練習を重ねたであろう163名（うち男子10名）の豆ピアニスト達、それに付き添いのレッスンの先生方や父兄の方々と、会場の教育会館ホールは実に盛況を呈した。前述のように課題曲はハ長調の曲でありポピュラーな曲ではあるが、様々な要素が含まれ、内容的には難しく、参加者のうち楽にクリア出来た参加者は10名前後であったというのが、審査員の共通意見であった。

このことから、演奏後に述べた著者の講評要旨は、ある目標に向かって努力することの素晴らしさ、音楽という瞬間芸術のもつ非情さと厳しさ、そして課題曲が秘める内容に関する解釈とイメージ作り、この曲集全体の見直し等の重要性についての指摘であったが、他の審査員から、ご賛同頂けた。

ところで、下関女子短期大学保育科でも音楽（ピアノ）の授業にブルグミュラー二十五番練習曲を採用していることから、これを機に一要素と考えられる課題曲についての独自の解説を試みてみようと思う。全音出版社のこの曲集¹⁾の解説にもあるとおり、この曲集は全曲に題名が付いた表題音楽である。題名が付してあるということは、曲の内容をイメージし易いということである。ピアノを始めて、この段階に至るまで、基本的には音律論からなる音の高低の分割、構成（調号・音程・音階等）、あるいは、時間という空間を分割する拍子・拍、また物理的法則を逆転させた技術（音の強弱）等音楽のもつ最低限の数学的約束ごとを理解することに大部分の時間を費やした筈である（勿論この大部分は実技練習という手段によってであるが）。初級の学習者にとってある意味では苦痛をとまなうこれらの約束事を、ある程度理解した上で、この教則本に出会うのである。あるテレビ番組で、脳でイメージする力は驚異であり、暗算、

将棋などを例にとって最近話題になっている「超能力」は「超脳力」の字をあてる方が妥当ではないか…と取り上げていたが、人間の持つ脳という際限もない能力をもってイメージするという意味で、前述の特徴をもつこの教則本の利用価値は高いと思われる。

私達が日常接してきた日本の音楽、民謡、子守り歌、わらべうたにしろ、本来、労働、作業、遊び等の動作、所作をとまなうものであり、大部分のものが歌詞を併せもつものである。その結果として、歌詞からくるイメージがかなり主要な部分を占め、音楽・曲のみによるイメージ作りを、我が民族は苦手に行っていると思われる。このことは、日本音楽にかぎらず、西洋音楽をベースにした日本人の手になる音楽も同様であり、童謡、流行歌、軽音楽を問わず、歌詞を持たずに歌われる曲（口ずさむ）、ヒットする曲は極めて稀である（行進曲等、特殊な例外を除いて）。我が国の映画音楽、あるいは、毎日、毎週とっていいほど耳にするテレビ番組のテーマ音楽、主題歌ですら、歌詞をとまなわぬ曲は1年も経たずに口ずさむことさえ出来ないのは何故なのだろうか。多くの外国の映画音楽、その他の名曲を聞くにつけ、どこに問題があるのか、多くの疑問を感じる次第である。

仮に、この曲集に表題がなければ何をイメージするのであろうか。「詩は歌え、歌は語れ」と言われるように、ここでは前述の数学的・物理的約束事を離れ、物語あるいは情景描写、内面的描写に焦点をあてて、私なりにイメージ作りを試みようと思う。

2. 解説の試み

No. 1. 「素直な心」(La candeur)

目を閉じて心を静めてみましょう。

最初の小節の旋律は静かな心の動き、同様に次の小節もⅣ度の和音を用いた同じ旋律です。またリピートの後の9小節の左手は進行は逆ですが、Ⅴ度の和音による同じ形です。このようなことからどこから見ても安定感、安らぎを感じさせます。誰にでも合う、誰からも好かれるやさしい素直な心の持ち主なのでしょう。とはいえ、何も考えない訳ではありません。心の中では、いろいろ悩み考え、「これでいいのか」…と自問自答しているのでしょうか。でも、周りの人には決してそれと悟られず、安らぎを与える心の持ち主なのです。色にたとえれば、白または淡いピンクなのでしょう。

No. 2. 「アラベスク」(Arabesque)

からみ合った蔦の上を虫が飛びまわっています…てんとう虫なのでしょう。見た目には絡

み付きそうなのですが、実に上手に遊んでいます。藁のバネを足場にジャンプをしたり、中にもぐったり…ふざけあっているように見えます。遊び疲れて休憩するかと思えばまた飛び始めました。

しばらくすると、とうとう疲れて藁のベットの上に急降下です。

No. 3. 「牧歌」(Pastorale)

のどかな田園風景……今日も牧場の一日が始まります。

空気は澄み、草の香が一面に広がりとても静かです。柔らかな日差しの中、牛が「モー」といかにも退屈げに啼いています。あくびでもしているのでしょうか。

あれ！少し騒がしくなってきました。人も忙しげに動き始めました……一日1回の牛乳を町に運ぶ車なののでしょうか。

東の間の騒がしさが過ぎ去った後は、また眠くなるような静けさが戻ってきました。

No. 4. 「子供の集会」(Petite réunion)

子供達がおおぜい集まって話し合いをしています。いろいろ意見が出てきます…その度にざわめきが起こり、よい意見には拍手が送られます。「これでいいですか？」…司会の子供が大きな声で意見をまとめようとします。またざわめきと司会者に拍手するものと…でもどうやら意見はまとまりそうです。

その時、また新しい意見が出てきました。また起こる拍手とざわめき……。

司会者が一生懸命意見をまとめようとします。「これでいいですか」…拍手が起こり、どうやら意見がまとまったようです。

No. 5. 「無邪気」(Innocence)

小さな子供のあとけない、可愛い身体の動き、心の動き、しぐさを表しています。母親におねだりでもしているのでしょうか。初めは小さな声でお母さんをお願いしています…でも、なかなかお母さんは聞いてくれません。そのうち段々声が大きくなってきます。「ネー、ネー」今にも泣きだしそうです。

とうとうお母さんの方が根負けしたのか、お願いが聞いてもらえたようです。

今にも泣きそうだったのが嘘のように、喜びが全身に溢れていきました。嬉しくて心はウキウキ……天にも昇る気持ちです。

No. 6. 「進歩」(Progrès)

良きパートナーを得て、お互いに少しずつ成長していく様子を表しているのでしょうか。3歩進んで2歩下がる……お互いに意見を出し合い助け合って、ひとつの目標に向かって進んでいるようです。ある時は立ち止まり考えながら……しかし、ひとつの目標を達成するのは容易ではありません。

リズムに逆らったアクセントは意見のくい違い、あるいは逆境を表しているのでしょうか。逆境を乗り越え、意見を闘わせて、また新たな前進を始めます。

No. 7. 「清い流れ」(Courant limpide)

まるで水の妖精でもいるようにサラサラと流れる澄みきった川……その流れに沿って上流に向かって歩いているのでしょうか。険しい渓谷を巧みに縫って流れは続きます。山の頂に昇ると空気は澄み、とても静かです。

ボタボタと木の葉や草から垂れた水滴が集まって、やがてあの大きな美しい流れになるのですネ。

No. 8. 「優美」(La gracieuse)

抽象的で説明の難しい題名ですが、絹の肌ざわりというのでしょうか、孔雀が優雅に羽を上げた様子、あるいは空に舞う天女の羽衣を表すのでしょうか。いずれにしろ、きらびやかで、美しく、しなやかな動きを感じます。普段優雅な孔雀も水浴びの時は実に楽しそうでおどけて見えます。でも、手入れには余念はありません。水浴びの時おどけて見えた孔雀も羽が乾くにつれて、また、あの優雅な姿に戻っていきます。

No. 9. 「狩猟」(la chasse)

狩猟に向かう一団の力強い勇壮な足音が響きます。

さあ、いよいよ狩猟が始まります。角笛が鳴り響きます。獲物は兎なのでしょうか。すばしく逃げ回ります。草むらの中に逃げ込みました。耳を立て、目を光らせてキョロキョロしています。合図の角笛が鳴り、ひと休みです。

もの悲しい a-moll の部分は夕暮れなのでしょうか、思ったほどの獲物がなく、寂しく残念な気持ちなののでしょうか……いずれにしろ短い休憩の後は、もう一仕事です。

一日の狩猟で皆疲れてきました。狩猟が終わり一団が引きあげます。

No.10. 「やさしい花」(Tendre fleur)

春の或る日、野原に遊びに行きました。一面に敷かれた若草色のじゅうたんにも心もウキウキしてきます。あちらにも、こちらにも花が咲き、蝶々や虫達も楽しそうに花と戯れています。

赤、黄色、ピンク、紫……とても美しい花を見つけました。顔を近づけると、とてもいい香りです。手にとって頬ずりをしてみました。

歩き回ったので若草のじゅうたんの上で少し休憩です。お休みの後は、また花探しです。自然の織りなす色は心に安らぎを与えてくれるものですネ。

No.11. 「せきれい」(La bergeronnette)

川のほとりでたくさんのせきれいが鳴いています……チンチン、チンチンとても賑やかです。……と何かの物音に驚いたのか急に静かになりました。あたりの様子を伺っているようです。しばらくすると一羽のせきれいが水辺に降りてきました。羽を広げて尾を上下に動かしながら気持ち良さそうに水遊びをする様は、ダンスを踊っているようです。それに合わせるように、他のせきれいも水辺に集まって鳴き始めました。楽しそうに飛び回り、ダンスもフィナーレです。

No.12. 「さようなら」(Adieu)

愛する人との、悲しい別れです。凍りつくような冬の寒さと悲しみで、心は激しく揺れ動きます。永遠の別れを思うと、悲しみが激しく込み上げて溢れる涙も止まりません。

思い起こせば、いろいろな事がありました。とても楽しかった日々、二人の顔は希望に輝き、夢を語り合った、あの日、あの時、掴みきれないほどの幸せに埋もれた日々……様々な事が走馬灯のように、頭の中を駆け巡ります(紗をかけた画面のように)。ああすればよかった、こうもしてあげたかった……でも今はお別れです。

この悲しみを乗り越えて、幸せの訪れることがあるのでしょうか。今はただ、時の流れに身をゆだねるだけなのです。

No.13. 「なぐさめ」(Consolation)

この曲は1ページ分を、あえて2ページに引き伸ばしてあります。退屈さを感じる曲ですが、そんな感情をこの曲で表現させたいのでしょうか。子供であれば、何か気に入らないことがあるのでしょうか。お母さんに何やらブツブツ言っています。大人であれば少しお酒でも入っているのでしょうか。

何やら口の中でモゴモゴ言っていた子が、話し始めます。あまり大したことではないようなのですが、今の本人にとっては重要な問題のようです。

聞き手は、相手を傷つけないように、なだめたり、すかしたり、合ツチをうったり、大変な気の使いようです。やっと話が終わったかと思うと、またブツブツと愚痴をこぼします。話の内容は、殆ど同じ事の繰り返しなので、聞き手はとても根気がいりまするそのうちに話し疲れたのか眠りそうになってきました。

眠りかけた赤ん坊を、起こさないよう、そして身体を話す母親のように、細心の注意が必要です。

No.14. 「スティリアの女」(La styrienne)

この曲はある地方で踊っている女性を見て、その華麗さ、美しさに感動してそれを脳裏に描いて作曲したのでしょうか。

ダンスなののでしょうか、バレエなののでしょうか、腰を屈め、手を広げて挨拶をし、踊り始めます、しなやかで、優雅で、キレのある素晴らしい踊りです。流れるようなワルツのリズムに乗って、ときに華麗に、ときにもの悲しく、躍動感に溢れ、観衆を魅了する素晴らしい踊りです。衣装はきらびやかな民族衣装なののでしょうか。

……と背景が変わったのでしょうか、踊り手が変わったのでしょうか、踊りの内容が少し変化して、非常に高いジャンプ力をもった踊りに変わります。高くジャンプして、しなやかに舞い降ります。その踊りが終わると、また初めの踊りに戻ってフィナーレです。

No.15. 「バラード」(Ballade)

3小節目から始まる左手の旋律は何かが蛇行して迫ってくる感じがします。虫の大群なののでしょうか、蟻の大群なののでしょうか、少し怖い感じで、右手のリズムと合せて、かなり速い速度で近付いてきます。

ここでは、変わりやすい夏の天気を想定して、子供のお話で(デンデラ、デンデラ)と表現

される雲にしてみます。夏の暑い日、遠くで発生した真っ黒な雨雲が、強い風に乗って、どんどん迫ってきました。空を真っ黒に覆いつくし、激しい雨も降ってきました。

…と、黒い雲の合間からお日様が差しはじめました。東の間の晴れ間を楽しむかのように、動物や鳥たちが遊んでいます。それはほんのちょっとの間でした。

また天気が変わり、今度は怒ったように雷まで鳴りはじめました。動物たちは木陰や岩陰で息を潜めています。……やがて真っ黒な雲の軍団も、遠くに去って行きます。地面を叩きつけるような雨もおさまり、動物達の歓声が上がります。

No.16. 「小さな嘆き」(Duoce plainte)

小さな子供の悲しみを表現しているのでしょうか。

左手は動揺する、こまやかな心の動き、右手の旋律はその悲しみを表に出さぬよう、静かに、一生懸命に耐えようとする表面的な動きを表しているのでしょうか。しかし、心の葛藤が段々強まり、抑え切れなくなってきたのでしょうか。表面的な動きにも心の動揺が表れ始めます。小さな胸の悲しみが、それとわかるように頂点に達します。

そして悩み疲れたのでしょうか、あるいはひとつの安らぎを見いだしたのでしょうか……静かに終止です。

No.17. 「おしゃべり」(Babillarde)

仲よしグループ、あるいはクラスの様子を表しているのでしょうか。

初めは、小さな声でお話をしていたのですが、段々話し声が大きくなってきます。余ほど面白い話なのか、身振り、手振りをまじえて、ペチャクチャといかにも楽しそうにお話をしています。まわりの子供達の声もどんどん大きくなってきます。……と「シッ！静かに！」誰かが大きな声で叫びます。その声に一瞬みんな水を打ったように静かになりました。先生でもいらっしゃったのでしょうか。……そうでもないようです。

そうでないとわかると、またおしゃべりの続きです。今までより、もっと騒がしくなりました。どんどんエスカレートして、もう抑えようもありません。

学校のクラスでよく見かける光景ですネ。

No.18. 「心配」(Inquiétude)

この曲は初めから終わりまで、同じリズムで作られています。同じ人の、微妙な心理面の動

きを表現しているのでしょうか。

何かとても気に掛かることがあります。宿題なののでしょうか、明日の課題なののでしょうか。早く済ませてと思いながら、心は他の楽しいこと、遊びに向かいます。

短い時間ですが、心配事など忘れたかのように遊んでしまいました。……夕暮れになると、また心配事が頭をよぎります。「どうしよう、どうしよう」…気ばかり先走るのですが、なかなか手につきません。夜になってベッドに入っても不安がだんだん大きくなってきます。

「どうしよう、どうしよう」……そう思っているうちに眠ってしまいます。

No.19. 「アベ マリア」(Avé Maria)

教会で敬虔なお祈りを捧げる曲です。礼拝堂にパイプオルガンの音が荘厳に響く様子をイメージして、心の中一杯に願い事を広げて下さい。

教会での礼拝は、俗世間での様々なことを忘れ、心の疲れを癒し、身も洗われるようです。マリア様の声、やさしく暖かく心に語りかけて下さる教えは、私達に安らぎと勇気を与え、ある時は厳しく、またある時はやさしく導いて下さいます。

この曲に表示された $\text{♩} = 100$ というテンポはどのようなのでしょうか？

左手を $\frac{3}{4}$ $\text{♪} \text{♪} \text{♪}$ という伴奏にすると、円舞曲、ハイキング、ピクニックという感じにならないでしょうか。

教会、パイプオルガン、音響、心いっぱいのお祈りをイメージして下さい。

No.20. 「タランテラ」(Tarentella)

タランテラはナポリ地方に伝わる、8分の6拍子の動きの激しい、速いテンポの舞曲です。陽気なお国柄のせいか、非常に情熱的で躍動感に溢れています。

最初のオクターブ違いの同旋律は力強さ、ないしは複数の人の踊る様を表すのでしょうか。民族衣装の裾をなびかせて、激しく踊る様は何かを念じているようです。リズムカルな曲ですが、旋律が暗い短調であるのは、この地方に伝わる、毒蜘蛛（タラントゥール）に咬まれ、この曲を踊れば治ると言う言い伝えを信じ、悲しみを堪え、懸命に踊っているのでしょうか。

中程の長調の部分は祈りが天に届く様子なののでしょうか。激しく踊り続けた後は、天命を待つかのように、祈り込め静かに終止です。

No.21. 「天使の声」(Harmonie des anges)

地の底から天まで響きわたる天使の声、あるいは左手と右手で、それぞれ自分と天使との話

りかけ、会話を表現しているのでしょうか。嬉しいとき、悲しいとき、また苦しいとき、天使の声は暖かく、共に喜び、悲しみ・苦しみは吸収して下さいます。天使の声との会話は、自分自身の心の語りかけなののでしょうか。

喜び、悲しみを思いっきり、天使に語りかける時、ホラ！……溢れるように、空一杯にちりばめた、安らぎが降ってきます。

No.22. 「舟歌」(Barcarolle)

のどかな田舎の風景を思い浮かべて下さい。

大きな川があります。そこには、渡し舟なののでしょうか、川下りの観光の舟なののでしょうか、一艘、岸に停泊しています（村の渡しの船頭さんは…で始まる「船頭さん」の情景なののでしょうか）。

舟は岸辺で静かに波に揺れています。「舟が出るゾー！」…辺りの静けさを破って船頭さんの大きな声が響きます。「舟が出るゾーッ！」もう一度船頭さんが大きな声で呼び掛けました。しばらくして舟を漕ぎだします……舟を岸から離すため、長い竹の竿を使って川に乗り出します。岸から離れ少し深い所にきました。船頭さんは竹竿を櫓に持ち換えます。そして櫓で漕ぎ始めると、櫓のしなる軽いリズムに乗って歌い始めました。とても名調子で、澄みきった川に響きわたります。

川の途中に浅瀬なの少し難所があります。歌をやめ慎重に通ると、また船頭さんは名調子で歌い始めました。舟に乗っている人達も心地良い舟の揺れと、船頭さんの歌にとっても気持ち良さそうです。

やがて舟は岸に着きます。船頭さんは櫓を竹竿に持ち換えて衝撃を与えないように慎重に静かに岸に着けます……さすがベテランの船頭さんです。

No.23. 「帰途」(Retour)

夕映えの光の中、遠くから馬に乗った人が走って来ます。風を切り、一目散に通過ぎて行きます。長い間、故郷（家）から離れていたのでしょうか。心は家に飛んでいるのでしょうか（私達が子供の頃に見た名犬ラッシーが、遠く離れた飼い主のもとに帰るように）。……いっとき早く帰りたい、その一心で走っているのでしょうか。決して平坦な道のりばかりではありません。天候の変化なののでしょうか、あるいは行く手を阻む、浅い川、生い茂った雑草、森、林等の障害物なののでしょうか。それらが行く手を遮ります。しかし家に早く帰りたい……その気持ちの前には、何でもありません。一目散に通ればけると、平坦な道に出ました。

辺りは、懐かしい見慣れた景色です……あと少しです。あと少しで家に着きます。心が休まります。やっと家に着き、緊張していた全身の力が抜けるようです。

No.24. 「つばめ」(L' hirondelle)

この曲も、18番の曲と同様に、曲全体を通じて同じリズムです。

春風と燕の戯れる様子を表しているのでしょう。左手の燕のいる場所が激しく移動します。「燕返し」の言葉のように、ここと思えば、またあちら、高く、低く、燕が右手の風を切って自由自在に飛び回っています。柔らかな春風が燕にとっては何よりの遊び友達です。急降下したかと思えば急上昇、実に楽しげです。高く舞い上がって羽を広げ、スイスイと風に乗っている様子は、グライダーのようです。

No.25. 「貴婦人の乗馬」(La chevaleresque)

ある秋の晴れた日、真っ白な馬にまたがり、とても美しく気品の高い女性が馬場に現れました。とてもセンスのよいお洒落と、整った顔だちは、周りの人の眼を集めます。黒革のブーツ、白のスラックス、フリルのついた真っ白なブラウスに輝くような濃い紫色のブレザー、黒い帽子といったところでしょうか。バカ、バカ……馬のひずめの音に合わせた、しなやかで慣れた身のこなしは、まるでファッションショーを見ているようです。その女性も衆目を意識してか、精一杯気取っているかのように見えます。準備運動に、軽いダッシュを繰り返します。「どうこんなものよ」……自信に満ちた馬上でのポーズは、そう言っているかのように見えます。

そして、スタート地点に向かい、爽やかな風をきって、軽く馬場を一周します。馬場の点検も終え、馬の調子も上々です。競争に備え最後の調整です。ハイドウ、ドウ、ドウ、手綱を通して感じる愛馬との呼吸も万全です。

さあ！いよいよスタートです。風をきってあくまで優雅に走ります……決して落馬をしないように馬にしがみついているかの情景を感じさせないよう……

この曲は途中で曲のテンポを変えていません。ということは、最後の部分の技術的に速く強く（速く走る）こと以上に「貴婦人の……」と題に示されるように、第一主題の優雅に歩く、ファッション性がより重視されると思います。練習の課程であまり早くテンポを上げ過ぎると、チャップリンのコマ落としの映画のように感じられます……これは華麗でも優雅でもなく、滑稽になってしまいます。

3. 結 び

以上の解説は、最初の主旨のように、出来るだけ数学的・物理的約束事を離れ、楽語等の表現に変えて、国語あるいは絵画的表現・心理的表現を試みた。

ある曲を聴いて、何らかの情景、あるいは物語の一場面、ある色等が脳裏に描写出来る…(私達が幼い頃に聞いたお伽話しや、ウォルト・ディズニーのバンビやダンボ等の一場面、あらずじが断片的に浮かぶように)。そのような能力を音楽によって体得し、また音楽を通じて表現できる……社会における多様化の波は音楽界といえども例外ではない。その多様化に対応するためには、あらゆる能力を内蔵した音楽性の養成が必要であると思われる。その一助、あるいは叩き台にでもなればと願う次第である。

本稿を試みるにあたって、下関女子短期大学の高井学長はじめ、多くの先生方のご助言を深謝する。

文 献

- 1) プルグミュラー二十五番練習曲、全音出版社、東京、
- 2) 浅香 淳編集：標準音楽辞典、音楽之友社、東京、1980